へ 13
3698
3

弘化
龍王太郎第五編
上
弘化戊申春
江戸通油街
松林堂上梓

門へ13
號3698
卷3

龍王太郎第五編 上之巻

小三馬作
豊國画

弘化五年戊申孟陽
菱屋孫兵衛

龍を鱗虫の長なりとの說文は見えたり。埤雅廣要小白龍を八十一鱗。九九の數と見たる。九は陽なりされば鱗虫の長なる。龍王の名を稱せるは龍九。則英雄の長ゆゑ。豊國ぬしの浮世繪の長作者の書舗の帳を賑はさんと。龍の鱗の九九八十一筆盤ぼくも堅てまいと冊子れ長編とるをうんと。汝ぞ拙文のて鉄面皮体と賢察も宜さまど鼻月明と跡ヲ酒品撰をひくのぞ近曽の流行なり。その流行は龍行也。龍王世ゆ行ならく祥徴をうんと。書賈ゆ攬掇て俗傷唄の龍の来歴をと戊申智慧の三本たる戯作者ゆゑ。つもよくゆ白とば排立る社撰ゆゑ。趣向も例の取次彼唖壺ゆ龍王太郎陰溝ゆ蛇足の誤べ。そこらの諸君後龍見たまへ。

弘化四年丁未中秋稿成
仝五年戊申孟陽發市

式亭小三馬戯題

珠珊太夫男
光吉

薄命の夫婦
雄猛
怨恨を演る
奸臣
牛窪郡領
宗武

龍

貞

龍
貞
方
花

○式亭正舗吉例れいろう
金勢丸代百文 五十文
酒の肴
空

天女丸代百文
南

名方
月丸

神方 聖利丸 一包代 五十文
世ふ通ド業あるさまつくと
人ふめるあらあいあるあ
あるまけ人まもねあるふ
一包用れがあるあさいろ
よくつるを泥このむ人いれく
天ものべたらふこ
る海とつ見かれて
あれわるをさ多ふ大人小児
ともつにあるよりさ効ぐ
の毒をしいらぐ用ふ
ちくれがのを世を
さげ牙件はをを毒ふるとむ

他家無類製法
千挺入四十文 五百挺入二千文
伊吹山御薬のぐさ
九年御
のぐさのをとぐわ
之正 女とかうを用ふ
仰牙殺あ
ふ生ち
さ上ち

その月よりうるはしのみすること
自生の者某ろう

神方 聖利丸 一包代 五十文
世ふ通ド業あるさまつくと
人ふめるあらあいあるあ
あるまけ人まもねあるふ
一包用れがあるあさいろ
よくつるを泥このむ人いれく
天ものべたらふこ
る海とつ見かれて
あれわるをさ多ふ大人小児
ともつにあるよりさ効ぐ
の毒をしいらぐ用ふ
ちくれがのを世を
さげ牙件はをを毒ふるとむ

他家無類製法
千挺入四十文 五百挺入二千文
伊吹山御薬のぐさ
九年御
のぐさのをとぐわ
之正 女とかうを用ふ
仰牙殺あ
ふ生ち
さ上ち

空
芳
夏

二
龍
穀
枝

玉見
五吾妻
香
相模ごま
代一
五十

杖

魔
玉兒

杖

△やまのかれき
きりかわ
まこと
ぶこと
ちぶ
たけ
ちぶ
なれいやうふの
つけとまて
ぶうまえとう
あめうりこれ赤
松どのせふあり
そりとあちこと
あつこと
あのくすえ
まやくすりのこと
ちもうこれめつかう
のそとものうくれ松
とうくめつかりうより
あうくとのをうこと
世をうこと
ゆくあんどへ
ひまこのう
まつくうふ
りうくゆうと
きうこう
きまこと
あまりて

天女丸

價 百二十四文

風水永頃を治せる名方
くすりのゆんを休むめ茶

月々のけいすねとこれをこれば
ちゃ！・いりやどスーきふまんもうわるぬる
行ゲ年もくすいゆんせどゆもやよれとうとあ
自在のまの方え・つよりきくすりふあ〜ぶをふ
ひろむるやどの茶うれいもの きつうひあく
仙人傳

人参印効油

一貝 五十文
貴 廿四文

・うちを・うちきぞ・きりきず・まりこう〜・ひぐ去日ゆけ
・あくきれ・ゆけど男女ちゃの中ちゃのできすの・うきが・こ
・耳のつこ・えるの中のできすの・ざちり・ちんど・ゆ・ずれ
ぐくむかされる・冬のくぶれ・婦人かくじどころのできすの既
きそ又ハいこ・又ハうゆきふより・又これをふところゆもを
ばれつびちうそゆりぞまひをうけざるりゆ〜ありり

引風 一夜かぜ

四季げん 一名 調氣湯

ゆりぐ
あき袋入 代廿八文

〆一・四季ちゆ風ふたてつけて用ゆれバどもまちねつをさり
さいしを考ゆ三夜のうちふなせいうとりわくゆ貝ぬぐ〜ゆ
るぐ〜ゆるゆ・ゆふ一夜のむ・ふ・ぐ〜ふ・ゆ・ひ〜ゆ・ゆ・ふ
ぶ〜ぶ・ぶ〜ゆ・ゆ・ぶ〜ゆ・ゆ・ぶ〜ゆ・ゆ・ぶ〜ゆ・ゆ・ぶ
あうのゆゆ・ゆ・ゆ・

豐國画

小三馬作

下

この巻の分つぎのごとくなり

人をうをいつゆめ
あそそのをもそ
あゆうのあぐたるむろ
きちこのろいそのをう
あうぐけのげんをうけ
てうってふむちとかひ
ろ住人大江とのと
ろ月ーがうくん
そんれいのことて。
ろをとうぐさあて
ととの人をまろ
このとつたさの
くるるうるけど
あきまちん中ろ
公のまたまちられ
あてこのとをの
まるたぐちふ
うけぐいやま。
のわのあき
るとかり名
まそぐけい
とぐく
さぐけるれ
あとを山中へ
まねうんと
つさとと❶

❶このやまへくちかつひふ
あとをあんとられゆあろん
ととこの山へとけのがひ
いつぐおあつゆそまゆく
ところそのゆうきをを
たのさんとさきゆい
あやしに

☒广仙いそうまをやよ杉の助
けゆめとをえていこのこがく。き
かりこをいもつぐつうアきのうます
こころスあのくるてんどゆのひめと
らひーもいろりゆてそのタのこまい
いこぐまゆてありとんをえそ
たてきぐのをるこれおのづ
ろのまあつろり
とけふぐん
ろうゆよう
をあつのきど
くをうんじて
まきのゆ
きてーゆや
まを師の
をうまあ
けゆれよと
あをろてたの
うゆ美かん人
ろくうちうる
づをよきろる
のりきこれ
山中ゆて
ひあるこを
わるとまれん
せをつにあく
をたまけんと
☒次へ

けゆめ
をうぐ
して

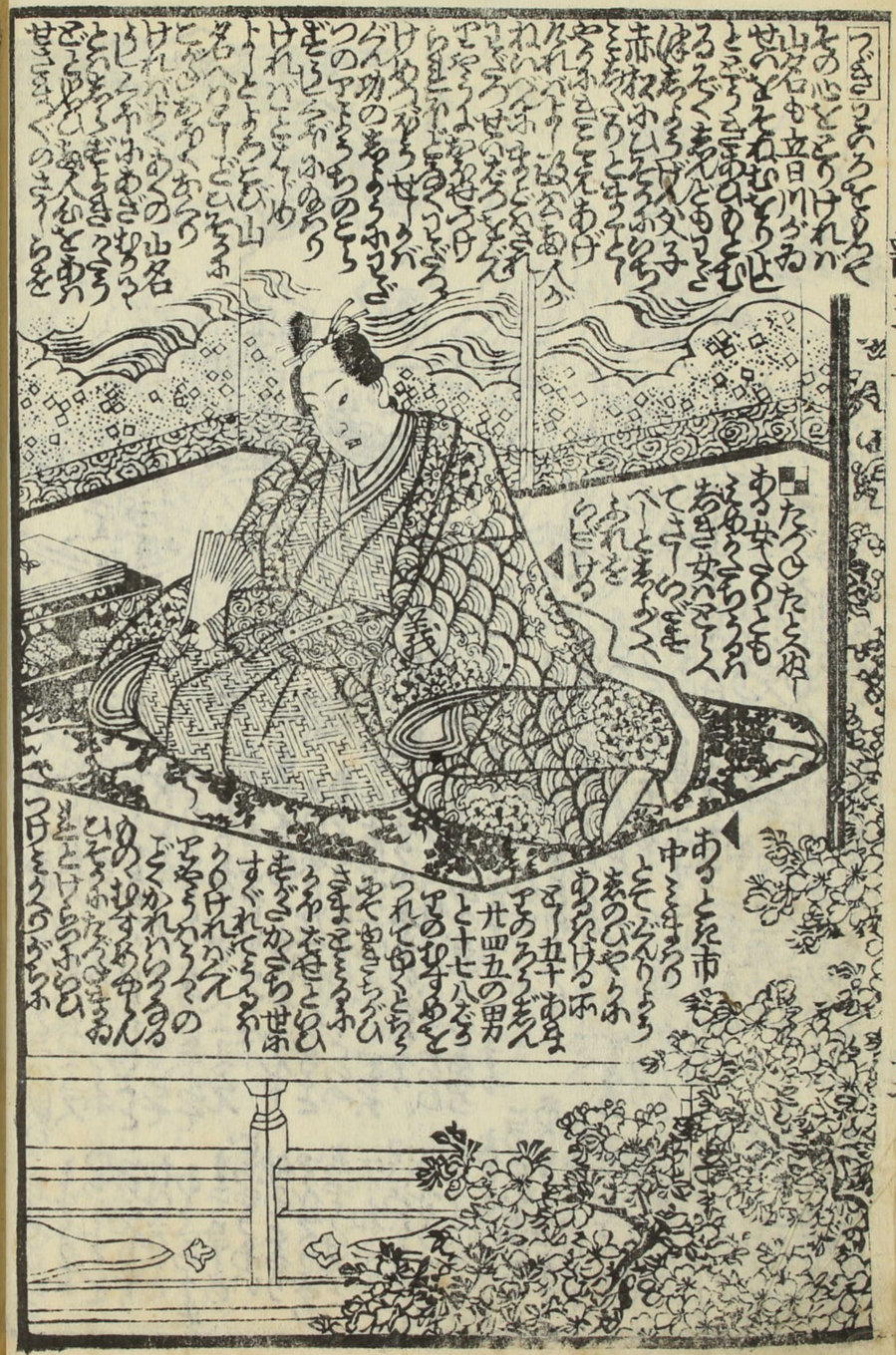
ゆん
せいを
ろををろけゆめ
これそとかこうこの枯
ゆがをとろてさうけけれが
ゆともふくくるゆふあきくこの
矢みくるきくゆてありけれいさ
きをきの助いぐろ。ぐんうこの
ををうあるうをを☒

つぎは 次へとぞ
てとかるつぎいそ
ぐ者ものを世づ
世の人をまどう
その人のゑんを
こげさせつきそ
つぐゐくらとこげん
まちこがれくるけのいま
おとふあいつるさいひ
のをきろくともをくでやあらん
とをいちうくろこちらこをも
一茶さきの助れあくて
のくら平地をたち
まち大海と臣山を
うをとるすとぎざい
るりのでそろをこの
ところくあくう
びとせんとりんとむす
ひあるのんとをるれが
たちまち山ぢめの
どうしをるらめんの
ぐらくとうり
のりあさ
がかく
たるをを
よすれが
きをの助
いぐいせんと

あとあさ臣てあどうく
るあのたるをこのあとも
るくいたりらちあんらんまん
たるよりのくやまいかくあり
けんとゆふだりの
るゑざるさるる
つまれりく
ふつまれりく
このまふ
ちらめく
ぎんせんの山
のそ
ふでる
名月の月をそれを
いちどふでる
あどろくのり
ずるとるくめ
ずうせんとし
又ものをむ
のどくちあ
るふやらん
あてらちでるのかけてとるりそぐうを

るくひうめ
ぎとりあとるく
ようー政公いまざ
ようりとそ
あんひうく
きをる
ーーーー
ところくり
そをぐちく
つくるせぬい
とふまいの
ろくたたに
ぐりければ
あんぐやえ
あつくあん
あふ君
ようーひさ公
うせあひ
ようまき公
どさうそぐの
まりい
ちん
つき
とーて
ちんそを
のちをう

ひとうく せんとあるをすぎの助い
あどうるそこいそん呼ゆいぐくふ
ゆやせをまふれぐくいらゆこくふ
ありちくうをとてうまれよと
るとりをそーめゆま仙とでめそ
これあーぎをもちの一茶さそ
とたうえそのうえうえ
あるうのすきをくとくべ
これをあるくとしそこいど
負い後日たまけとちるとと
あうくまうをあいとふ
かとらへいんせんがかちい
あうも若ものるあるぐ
とぐくうせるい世ちん
つるうちんるあくうんする
るーうあとるれくうんする
すきの助うかちふいらま
ひとちのすきをありとれそこん
あるうの茶るうあとあーいてうく
あうくろの一ゆちふとろよとさゆとうの
ゆうくとひとうるをしてくちうかけり
ぐりうう
ちくすぎの助い
あどうるそこいそん呼ゆいぐくふ
ゆやせをまふれぐくいらゆこくふ
ありちくうをとてうまれよと
るとりをそーめゆま仙とでめそ
これあーぎをもちの一茶さそ
とたうえそのうえうえ
あるうのすきをくとくべ
これをあるくとしそこいど
負い後日たまけとちるとと
あうくまうをあいとふ
かとらへいんせんがかちい
あうも若ものるあるぐ
とぐくうせるい世ちん
つるうちんるあくうんする
るーうあとるれくうんする
すきの助うかちふいらま
ひとちのすきをありとれそこん
あるうの茶るうあとあーいてうく
あうくろの一ゆちふとろよとさゆとうの
ゆうくとひとうるをしてくちうかけり
ぐりうう
ちくすぎの助い
あどうるそこいそん呼ゆいぐくふ
ゆやせをまふれぐくいらゆこくふ
ありちくうをとてうまれよと
るとりをそーめゆま仙とでめそ
これあーぎをもちの一茶さそ
とたうえそのうえうえ
あるうのすきをくとくべ
これをあるくとしそこいど
負い後日たまけとちるとと
あうくまうをあいとふ
かとらへいんせんがかちい
あうも若ものるあるぐ
とぐくうせるい世ちん
つるうちんるあくうんする
るーうあとるれくうんする
すきの助うかちふいらま
ひとちのすきをありとれそこん
あるうの茶るうあとあーいてうく
あうくろの一ゆちふとろよとさゆとうの
ゆうくとひとうるをしてくちうかけり
ぐりうう



つぎさうのころをとりけれが
その心どをりけれが
山名も立日川ざる
せのとをれむをり巳
ところうさあひとも
るそくあんともこと
ほちろうげ文子
赤れかいそふいちち
こそちろとすてと
やうふことそあげ
くれいより返ざあ人か
れいてふまとれそ
ちろうせいぞうをそえ
ぞやうしいるをこけ
らまれどとくこぞろ
けめうせいがの
ぐん功のきうふこど
つのアようちのとち
ぎとしぞかのうり
けれいことくめ
ようとようこび山
名へうーどいそうふ
ちんちりくあうり
けれうくあくの山名
しくやはあざなろう
とかきうぎうきうこう
どうとしあをあり
せさきくのさうらを

たづねたとゆ
ある女ろうとも
えあくちうろう
あきさ女ハさーく
てさーいづをを
べーとまうくあれを
らどける

あるとを市
中こそまうろう
とそぐんりょうふ
あるらけるふ
ア五十あまる
ア九四五の男
と十七八ぞう
アのなすめを
つれてゆくとちう
ぞやきこぶひ
さまをこるふ
うやなをとひ
きぐさかち世
すぐれてこうあう
うけれいぐ
アやうろうてのの
ぐかれいらうる
あいなすあゆん
ひそうふたぐひまる
ことけらふらひ
つけきうるぐちふ

かなまけれどう設公
山名あまをどひまうねどうしぐはい
さうるかきうるのめとをかりのうれが山名
のさうらとぐくらしぐはふちあせ
まうふそうまりそまりあうせーとをあをとあと
たどあおせけれかあざるりんをもむりんと
のはをそそれもしんぐうっそとうりせあ
ちうぐはーふはの人はあとをうぐけ
つふをそうーの助ざの京のうまをふ美
岡さえぐうえをいそうふぐくさうーあん
いかうとるぬのうとをとうろあく五ぐふ
きくめどあれのいをあうアくうゆそ近いこの
けうしんぐちんくのかぞうゆそ近いこの
ろんきうこ女国をあせアきうし山名
立日川とかをとうぐるやどあたのあん
とうりやうそ山名入たもうしんぐのけん
あめいあそうくかどのけんきんとうう
けうかしんぐんりううまくようくはき
ろあきうふあうきうし山名をもあざけき
うそんえんをとりをやうけのちーれ
山名をうそうひあ天下をたるぞう
のうんかうせいとその者ろうをそううぐひけう
かうんかんちのうあめうれい在京のちうは
こうそうくををつーをうりぐりてちうーどけ
在国のとをいれをうくるめるるけれが
このそどんあんぐあぐふちゃうしけうふ
ーづあうこうちあをぐりうをまう内をど
ゆうるれいゆくのりのとちうづけあまれく

かうけをけあこ
いとあぐさるりふ
つうーふ胡珠と珊さ
ぐ玉とふりのく
ろれる
たそゆ
あけ
めうぐうの
のちあで
らくた
あうふ

ここを
かくせ
ーが
者ろうの
あぐたるこ
ゆをと
内へ

つゞき ねらいとうえとつまの西ろをたゞ〳〵て
けみのへうろまゝまゝ西せきたゞくのまゝえ
まくてきのひまをうぐふうちわどうく
つまゝれ〳〵まゝうそうきとくまわ〜あいゞ
見もうすのあひゝろをたゞ〳〵ゝうまゝふ
世とゞそとうりけるあわをあくまとのひ
あくまゝとゞ光吉とゝのあとゞひとゝもゆちくは
くゝまゝふくつゝけるさえちまゞつまの
兄の子はてる作とゝくゝわゝゝぶせき
ゆゝちくゝゝそとゞまゞれくゝる美男
けいこふきてゝりゝゞゝちゝとゝ
おゝまゝおゝまゝとゝゞひゝとゝろ
あゝゞゞきのゝゝゝゝふゝた
ゝとゝるれゝるゝとゝさえちまゝ
ゆゝあゝゝきゝえふゝゝゝとゝて
ゝゝゝゝゞゞゝゝゝけゝえ
まゝゝゝけゝゝまゝちゝゝふ
ひゝゝゝをせゝとゝけふゝも
あゝとゝゝろゝゆゝとゝゝ
ゝゝゝゝゝゝふゝゝすゝまゝ
りゝゝまゝゝゝでゝゝかゝゝゝゝ
ゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

つぐさ
大布
極上
代百文
代百二十文
引
風一夜あり
代共文
仙傳
人参即功油
大貝五十文
代百文
五十文
黒薬
代三十六文
目の病一切より
奉り貝一日うて治せ
龍樹散
代三十六文
目あらし
のぞきの一切れより
さてさてさらに外のうく
ちろふてたの
あのかれそのぶいふあ
かれがなあつのり
せれわるん
ちぢつもた
あのかれ
きるわ
ふいへとうけそ
とりきれとつがの日
のりのつせ
さんたまが
ろもを
ア
もくろり
けやのつま
あ
ちがちろ
きんあつそ
このふこと
きよいわ
さろあの
ちぐ
きろ
今日さそふ
うけとつき
きれとのあせ
ろうとやとくとつぐさ
玉
照
元
牛
斉
や

つぎ
光吉
五の巻

てる作
光吉
さんたん
さん
五の巻

王
牛

牛
玉
兎

○武亭店粧家
婦人三養良湯
大包百文 小包五十文
さえぜんを為さんど
あとそのうるやくまふ
ちのうまも一切まうる
さげつぎ切ふ
卯功あり婦人
ようのことをうて
五月キ月より毎
月十日ゆくよ
あてこうぶを
利ひのへば
十円きかまも
てあんぜんー
うまもて子
まもやうるり
その外ちのた
よりのうえぶ
たまもしーとと
ぶくうるあり

牛

虎

玉

つぎ せめてあつれるりかくるるけ元も天もやうぬぐんりゆうれゆう
よいこうとひえぬくやらだてる化ぶむるりとふくつうぬきこ水ま水さ泉水
せ水ぶをひとうえあつとだうりゆあつてんだうふうこうこるぐこゆくれ
てもる秋のまれのむりるそるくれもりそうりゆうめくゆうこるこをを
さうぐてんりゆうをてこゆうむうりちどゆてるひあにうそあて
けりお玉いあうるえらうをれあやもるこぐゆうらえくれ一ぐんりゆうぐ
ま元をんあらせうるてようのくうけんゆきのつてをうとのうくえ
つるぐんりゆうまうぐぶこをひうくきりとぐりつるでたこふまりつけ月ろ
ふそうひーどうつぐりてそもいけておうぬやうるれがめいどのみや
けかいつてきるるおのれがあのさんたまつれをさこすする
ゑとぐさゆつこびどうぐゆてあついつぐ
てのうちゆてこひこりそれとりふも
おのれゆるさわどあくこひーいこひの
かるらぬうらうぬらゆうふもいけ
ていあうぬとんでめゆあつを
ぐんりゆうぐてそれあさまへ
むうくこあうさそいさあて
ありしよのひぎひどうのでく
ゆくゆんあゆをあとそもふるんうぐ
どてまるかかこうのうるせんせのいんぐて
ぞゆゑゆくけうゆあとゆあうらせてさぬと
をうとあうくんどうつてあうひこんあうせさや
つけうゆとりそたうるとあうひきをあうらせ
こくつけどくいあとても今ふあとうらゆうぬうら
さそたへさんづの川のせどくゆをくとりとうぬどうらどさと
つそつうぬけどうこの毒をうどてくうんぬの
ぎゆうこさうはきすーくどりゆうこをさこゆうまへ
こううさがこうせこんぺくけどふこどまうこと

▲▲をとこぶりまぐれるふごもぬけゆ
るくゆうこふこきけれがよきこん
こいふこえふける○このちえりこりふ
やこさうねちゑんこうるきんぐでんぐこ
あまうこうもちつこーがうろあうひとり
むすあのお笠こうこうるくもち
こうるつーうりけうるふこもあうけうど
うちうどりここまりりくふ
ひこーこあこうるの庄作
こうふどんーせを
やたうきむこゆ
をそうこけう
はふどくのこう
らいちゆを
ここをゆ
ゆここふ
うちうか
けれがいきく
うるこのと
庄作ふのこと
けれれる庄
作もうりと
ようこうなうら
たちうるこうを
こうるようかの人へ
りの、
ふの

けこいあうるともうどうあーやうゆ
かうちとくんうこをとうるので
おこうろうとうるひまうをとと
ともせをえをどこうえで
むるさんとうきうひの
あこうしううけけいさうひ
のえにゆううせてゆうく
いきいいうこけいちどうこうゆ
あくまいどいいえんうとこと
けあとーてゆうりのえひとうちあと
又のとのどゆあうりゆよのいとも
あこうえをちりこゆあきうりうもうあゆも
さあうとうえんきうりゆ又うとえ玉のえ毒のえと
あういおうこうこーのうふあくこ玉せうゆえと
又ものきうけのむさけのうあいこゆとあうのふゆび
ざーかもゆすんやまゆ内がをけうこーゆもゆこうゆう
ゆもゆあうゆのあのうゆねもゆれとえくけれびゆうさ
のゆのめどもあうゆあうえれゆうえゆあうゆをゆうえのさゆの
どきくこもつこうこうもうこどゆあうゆうどうゆうのゆれどを
きこくこえゆくあゆのめこえうこうけゆこ
ゆくのあとうきこれよりうさいらゆうゆいうこうこのいくくふ
をこうゆうこうとうくこくゆうこのくゆいつのかこれとりゆきこうゆこ
かくゆこうこのくゆいつのかこれとりゆきこうゆこ
のまうゆこうのゆもゆうりゆむこゆれこゆーのうこゆゆこゆとゆこを
ろうゆゆこうーけゆなのゆこゆゆこうゆこうゆこゆこゆこゆこゆこゆこ
大ゆゆゆ

豊國画 小三馬作

本製 東酒
一升代四百五十
一合代四十八文
そもそもこの風味すぐれたる大酒
後又八百年の
酒あり酒あり酒あり酒あり酒あり
ざる則ち酒あり酒をつ
ぎ酒あり酒あり酒あり
酒あり酒あり酒あり
江戸本町二丁目
松屋ひろせ製

右の外
偽赤酒
哥仙の
名酒
庫年
庫進
梅
酒
酒
酒

式亭小三馬作
上

龍王太郎
英雄譚
第六編 上之巻

嘉永
酉春

式亭小三馬作

一陽齋豊國画

江戸通油町
藤岡屋
慶次郎
梓

這稗史は最長物語にして凡十編に至らんとせし全部の結局は自ら
時好に忤ひ書肆頻りに前編の
我面白の他喧しとて傍車
想ふべし在下が西の癖れ等
索れ侯来煩雑なる係れ
の怪談よりも六編の趣意なる
思應報の理を悟り勧懲の助とも

嘉永二年己酉春　式亭小三馬記

黒蟒口中ニ吉
黄蜂尾上鐵
両般猶不毒
最毒狡人心

狡人の為ニ瞋恚の
磨る刃心を刺
嫉妬の燃る
火鬼を
焦す
前世

藪坂の
管家
庄作

藪坂の
家娘
小笹

悪種と共時べ
今生ニ悪を生
ト未来ニ悪果を
むまぶ三世の因果子ニ
報ひて唯一心の理を
示す

雑貨商
山八

我向君家尋自家
家先得到君家不
自家事見了見自家
對鏡詩國團

加久ふ紙
ゆ去揚の郎

三浦龍丸正辰

捻右衛門の陰悪
娘小笹が
報に素て
生ずる
畜生
道が
重
落
を

貪慾邪
見ゆて心悟
蓄るれば財寶
庫が
満き
ども
守銭
奴と
なりて
施を
吉文あるべし
死す黄泉が到
きども一椀の早

山八

山八

山
針
蜜

米
蜜

○式亭家製造品市場
神方聖利丸一包代五十文
禹功

世ふ通じ一ぶくのみまくるこのくすりは
ものすごくよくきくるとあいてのこのくすり
いろいろどんなけつのあなをもねむる
ゆ一包用ふれいのあるものをろくろくうけ
●酒とのむ人はそのまま用いるべし

正銘 あやとうあんじ

大極上品一枚代二百文
上品一枚代二百文
かうり 廿四文より

世ふ通じくすりはいろいろ和製
ありまれどもこれは極品なれば
ことにてのちそのうえ他品より
まさるのはなるのぐは用ひて
さらめてよろし

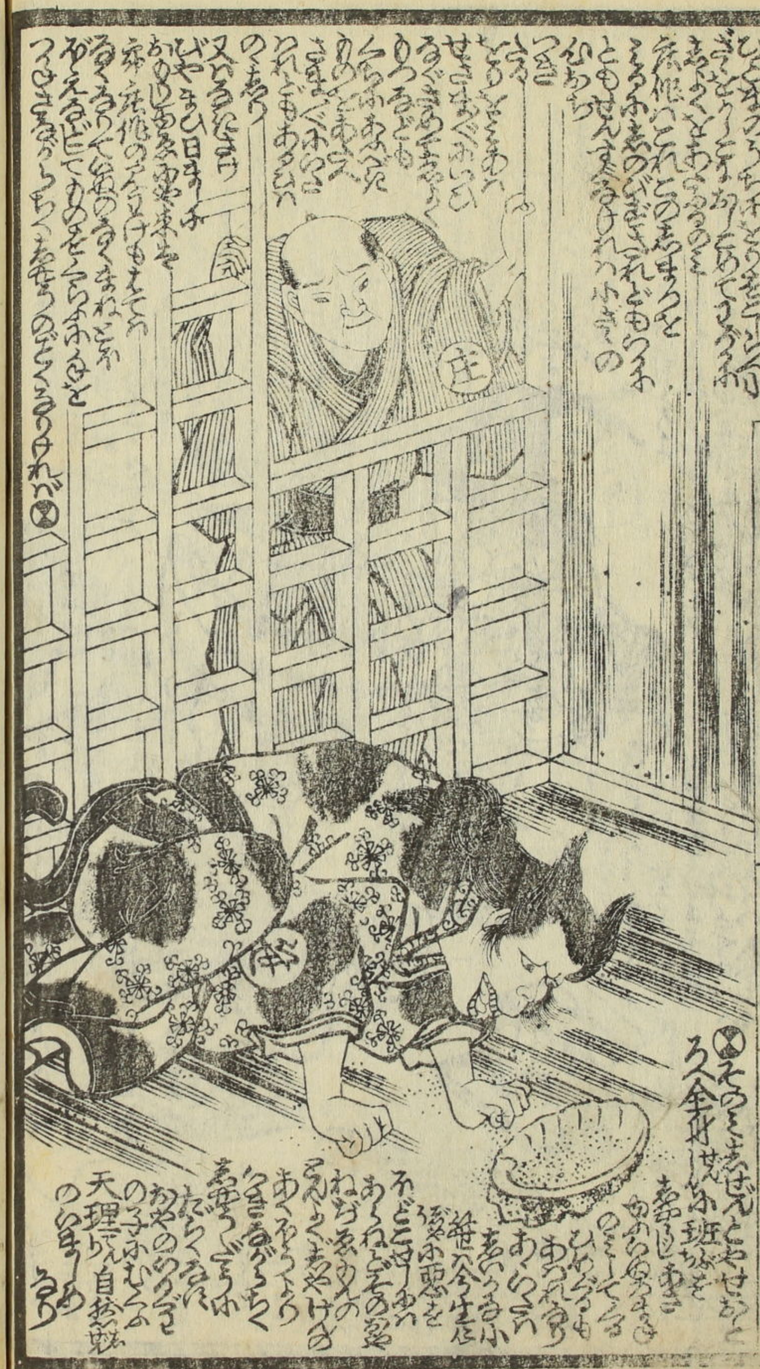
清浄天人香 一袋代二分
極製 一包代百五文

いちいちのにんにくの名をとり
ながらこれにくらべるものなし
ちりとてもくさいものなし
ちりとてもくさいものなし
ちりとてもくさい

○武亭製薬
婦人三養湯
大包代百文
小包代五十文
かけ百三十文

▲此おんなくすりは毎月
十五日目より
十日目くすりを
用ひのべ十日まで
のうまれ子をたき
ものなり

龍樹散
一包
代共六文



豐國画　小三馬作

嘉永二己酉春新刻目録

牡丹園女子莊子　初編　笠亭仙果作　一陽齋豐國画

繪本川中軍鑑　初編　玉蘭齋擇　二編　五雲亭貞秀画

實入穐花野苅萱　初編　柳下亭種員譯　二編　三編　一雄齋國輝画

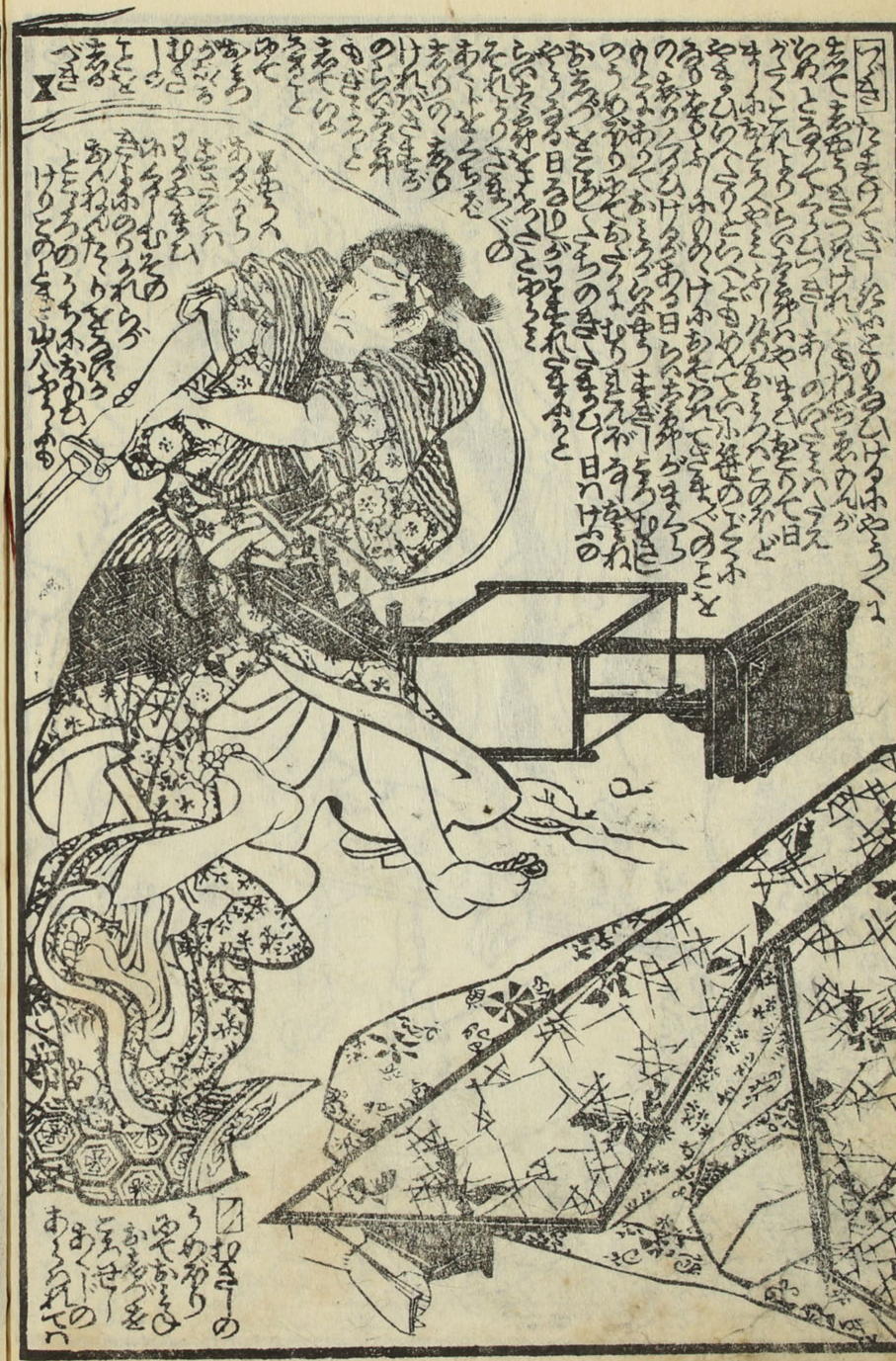
七草四郎若菜嬢子　ふゝ思ひ譚　初編　柳下亭種員作　二編　一陽齋豐國画

東都地本錦繪板元　藤岡屋慶次郎版

續
香蝶樓豊國画
龍王太郎
第六編
四冊
嘉永二年
己酉新版
藤慶梓
下

本草綱目ニ曰ク蜂ハ山谷ニ居シテ作房
赤黑色ニシテ最大也
蜜人至死ニ能釀蜜
其子ニ大ニシテ
白ク
因ニ云這巻中ニ
雜花貫山
▲財ヲ貪リ取ヲ巧ト
生ル毒悪ニシテ他ニ
害ヲ為ス大黄蜂
の針ヲ以テ蜜馬蜂の
人ヲ刺ス比ヲ見バ
蜜ヲ釀シテ是ヲ採
者ニ似タルモ山人ガ
娘ノ美色ヲ售テ
是ヲ求ル者ニ類ス
其娘ヲ
針ヲ以テ
妻ヲ
八ト云フハ
蜜ヲ
親子ト
好悪ニシテ利慾の
たゝ小人ヲ欺ク▲
東大郎従来悪ル
財ヲ失ヒ過ツ数ヲ
拾ヒ門の邪慾ニシテ不義の貧ニ富ニ是ガ
為ニ亡失ヒ至レル支天道自然の応報を
与ヘ因果応報の明ラカニシテ云ヘ克其
理ヲ悟ル善支ヲ行ヒ悪意ヲ徒ニ行フベシ

龍王
下の巻
大帝
第六編
小三馬作
豊国画
嘉永三庚戌
蒹葭堂梓



作者口上
神方還生酒
本町三丁目花御殿
松屋廣瀬製

作者口上

○式亭正舗制製茶
金勢力丸 大包百文小包五十文

○式亭正舗制製
金勢力丸　大包百文小包五十文
酒のあしとさまたげ　酒をとくのまむ
一ノ効ノ如ク其効ノ如ク
中ノ効ノ如ク

○ふ紙の名目ぶ川のさくら

一陽齋豊國画　式亭小三馬作

龍王太郎英雄譚　六編　七編　八編　式亭小三馬作　一陽齋豊國画

五色染浮環冊子　二編　三編　式亭小三馬作　歌川豊國画

花白梅春風　初編　三冊　式亭小三馬作　一雄齋國輝画

落話江戸嬉笑　初編　福亭三笑作　一雄齋國輝画

東錦繪地本屋　江戸通油町南側　藤岡屋慶次郎

式亭小三馬作
一陽齋豐國画

龍王
太郎
英雄譚
第六編

己酉春
藤慶